

第15回菱肥会全国連合会総会開催

去る7月13日、経団連会館国際会議場（東京・大手町）に於いて第15回菱肥会全国連合会総会が開催された。菱肥会会員及び賛助会員メーカー、業界関係者、報道、関係省庁、三菱商事ほか全国から約170名の参加を得て盛大に挙行された。当社取締役会長の吉田毅（三菱商事理事基礎化学品本部長）より、長年に亘る菱肥会会員の活動・活躍に改めて謝辞が述べられ、続いて全国菱肥会会長で三菱商事（株）基礎化学品本部の宮澤肥料部長からは、中長期的な海外原料市場の需給タイトの下でも三菱商事グループとして安定的な原料確保に努めていくことや、国内農業環境の変化にあっても菱肥会とともに日本農業発展に貢献していく旨挨拶があった。また、前期に続いてV-2020期での全国菱肥会理事長をお引き受けいただいた豊田肥料（株）豊田富士雄社長からは、農業環境が転機になる今だからこそ更なる競争力強化の為、菱肥会メンバーとして現場の意見によく耳を傾け、それを販売へと繋げていくことの重要性についてお話があった。来賓挨拶では農林水産省生産局技術普及課生産資材対策室の今野聡室長、経済産業省製造産業局素材産業課の喜多正人課長補佐より日頃の行政の取組に対する理解と謝辞がなされた。



続いて、当社代表取締役社長三宅誠二よりV-2020事業計画（食の農の架け橋 Ver.5）の内容について以下の通り説明が行われた。

①アグリサービスの充実

農業構造や肥料業界を取り巻く環境の大きな変化をチャンスと捉え、商系ならではの地域密着を念頭に多様化する作物、品種、或いは新たな栽培方法に対応するため、肥料等を通じて質量両面での農業生産力向上への貢献を行っていく。肥料では、とりわけ収量増や品質向上、更に省力といった農業生産力向上に資する機能性商材の更なる拡販・普及を賛助会員メーカーの支援のもと会員の皆様とともに進めて行く。また、三菱商事グループが農業分野で展開している様々な事業（米、青果物、或いは次世代農業ビジネス）も活かし、肥料拡販につながるよう会員の皆様への支援を継続する。

②研修の充実

肥料販売に欠かせない栽培に関する新たな知識・技術習得を深めるため賛助会員メーカーによる技術講習会やMAC JOURNAL等による情報発信、ブロック交流会、実務者研修会等を通じて会員間の情報共有を推進する。その他としてV基金および福祉制度は継続して行う。

休憩を挟み、経済ジャーナリストの渋谷和宏氏より「激変する日本経済～輝く地域・輝く人の条件～」という題目で記念講演が行われた。渋谷氏からは、日本のGDP約6割を占める消費で大きな構造変化が起きているとの話から入られ、この変化をチャンスと捉えビジネスを展開している様々な例をあげていただくとともに、「リーダーの聴く力」の重要性にも言及された。元気が出るとともに参考になるお話しで、聴衆の皆様からは大変好評をいただいた。



さくらんぼ王国 山形県 ブランドの取組

6月は「赤いルビー」とも称される桜桃（以下、さくらんぼ）が出回る時期となる。そこでさくらんぼの生産量日本一の山形県における取組をご紹介します。

さくらんぼはイラン北部のカスピ海沿岸やトルコが原産地と言われており、山形県では1875年に苗木が持込まれ翌年に栽培が開始、2017年統計で山形県は14,500tとなり生産量第2位の北海道を大きく引き離し全国の生産量の7割以上を占める自他認めるさくらんぼ王国である。さくらんぼの品種は6月初旬より早生品種の紅さやかから始まり、佐藤錦、紅秀峰、ナポレオン、紅てまりと7月中旬まで収穫が続く。また、昨年末に500円玉の大きさを誇る「山形C12号」（名称は未定）も発表され県自体のブランド維持についても事欠かない。このブランド維持のため収穫期はもとより開花開始期前の4月中旬から6月末まで産地では瞬間的に人口増となる。これはさくらんぼ出荷に携わるパート従業員の雇用があるためだ。この2か月間は田植えが終了した主に水稻農家の女性の僅かな農閑期の臨時雇用となっており、葉摘み、摘果、収穫、選果作業まで住み込みで県内だけでなく近隣の県外からも応援で働きに来る場合もあり農村は活況を帯びる。然しながら、近年では短期間の働き手確保に悩まされている。さくらんぼの場合、単なる労働作業とは異なり葉摘み、摘果については一定程度の技術が必要でさらに芸術品とも言える1粒1粒平らに並べる箱詰め作業は習熟度も求められる。よって、山形県では農業関係団体だけでなく労働局や市町村と連携し県農業労働力確保等対策推進協議会が設立され求人や労働者の派遣に向けて取り組んでいる。

今回、山形県特約店の山米商事株式会社が契約している天童市の平田農園に訪問し現場の状況をお聞きした。園主の平田修一氏は贈答用のさくらんぼは糖度24度を目標として品質維持に努められ「収穫が終わってからが始まり」を自負し礼肥から始まり防除、剪定等肥培管理に心血注がれる62歳の篤農家だ。80aのさくらんぼ園を所有しピーク時に25名の臨時雇用を取って農繁期に備えておられる。人手の確保については有難い事に従業員のロコミで今までは大きく困らずに過ごして来ているとのことだったが、将来的な心配事は園主も含めて毎年1年ずつ年を重ねるので技術を持つ熟練の短期的な臨時従業員の確保が課題として挙げられたことが印象的であった。果樹類の中でもさくらんぼは機械化や省力化が出来ない部分があり過去から品質維持や省力ため雨よけハウスの導入や樹が高くないV字仕立て法の確立など技術は進んでいるがブランド維持のためには人材が重要だという事を改めて取材で感じた。

山米商事株式会社では全国の取引先に贈答用のさくらんぼを案内している。同社では12軒のさくらんぼ生産者と契約を結び集荷した出荷物の再検査（キズ、糖度、規格、重さ）を実施、万が一クレームが発生した場合には迅速に生産者から消費者まで直ぐにトレース出来る体制を組んでブランド維持に取り組まれている。1名で日量約100kgを検品するのが限界との事だが、ブランド維持のためにはこのような見えない陰の努力が必要だ。本紙で紹介される頃には佐藤錦は済んでいるが、大粒の紅秀峰も一品である。是非山形の「赤いルビー」をご賞味ください。（東京支店）



この度の西日本豪雨で被災されました方々には心よりお見舞い申し上げます。一日も早く復旧、復興が進みます事を心よりお祈り申し上げます。猛暑が続いておりますので、お身体には十分お気を付けてください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>